神機使い達の戦い

レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神機使い達の戦い

【Ｎコード】

Ｎ９１７０Ｘ

【作者名】

レイ

【あらすじ】

ｐｉｘｉｖに投稿した作品を連載させてみようと思い、始めてみました。

処女作なので、文才には期待しない方が良いかと…

極東支部の新型神機使いロイは、たくさんの仲間と共にこの世を喰らい尽くす【アラガミ】を倒して行く。しかし、ロイにはある秘密があり…

オリジナル設定あります。主人公はチートです。テストや塾の都合上、更新が遅れる場合があります。

vol.1

「おっ、いたいた」
霞んだ太陽の下、立ち並ぶ廃墟の街で、一匹のトラに似たような生物が血溜まりの中で、生きていたであろう犬のような生物を喰らっていた。血溜まりは、とても鮮やかな紅い色で、まるでパレットの上の赤い絵の具みたいだ。
「あれが、今回のターゲットか」
そうつぶやく少年の腕には、赤と黒でできた腕輪をはめ、その手には、常人では持ち上げることさえ難しそうな、少年には不釣り合いな、白く、そして、黒い刃を付けた大きな鋸を「片手」で持っていた。
身長１７０ｃｍくらいの彼にはとても大き過ぎる代物だった。
少年…ロイは、ちらとヴァジュラをみると、ヴァジュラに向けて、大鋸を持っているとは思えないようなスピードで走り出した。　ヴァジュラは食事中のため、接近して来るロイには気付かない。
近づいてみると、ヴァジュラの全貌が見えて来る。全身、黒い毛で覆われていて、紅のマントをしていた。大きさは、５ｍくらいあり、ヒトが抗えるような生物ではない様に思える。食事中のため、顔は見えないが、可愛い顔をしてるとは到底思えない。
「くらえっ！」
ロイが、ヴァジュラの後脚を凶悪そうな大鋸で斬りつける。いや、削る、という表現が正しいのかもしれない。斬りつけたことにより、ヴァジュラがこちらをみる。…やはり可愛い顔はしていない様だ。トラのような顔に、二本有る内、一本が折れている牙が特徴的だ。
「グオオオォ？」
ヴァジュラがこちらを向いて威嚇する。ロイは、怯みもせずに、ヴァジュラの顔に大鋸を振るう。鮮血が、飛び散った。赤い血が、地面に向けて落ちる。

「まだまだぁ！」
ロイは、更に追い討ちを掛ける。二回、三回と、前脚や顔を斬りつける。ヴァジュラも負けじと、前脚でロイを切り裂こうと、ロイに向けて振るう。　しかし、ロイには、まるで見えているかのようにして、かわす。どうやら、ヴァジュラとは、何回も戦ったことが有るらしい。
何回もヴァジュラを斬りつけるうちに、突然、ヴァジュラの目つきが変わった。
「ガオオオオオ？」
ヴァジュラの周りには雷が迸（ほとばし）る。怒った様だ。…それもそうだ、食事中にもかかわらず、いきなり自分を斬りつける敵に、怒らない訳が無い。
ロイは、一旦離れると、広場の方へと走り出した。　ヴァジュラもその後を追う。［ｎｅｗｐａｇｅ］
ロイは、広場の向こうにいた。突然、大鋸が滑らかに滑る様にして、一瞬のうちに、ガトリング砲へと切り替わる。途端に、ヴァジュラに向けて、かん高い発砲音と共に、冷たく、青い弾丸が飛んで行った。
ヴァジュラは、走っていたため、モロにくらった。　走るのをやめる。…と、思ったら、いきなり、ロイにめがけて飛び掛かって行った。ロイは、横に転がり込み、難を逃れる。
ロイは、ポケットに手を入れる。そして、ポケットから何かを取り出した。銀色の手榴弾のような物で、安全ピンを付けている。
ヴァジュラは、こちらを向いて飛び掛かってくる。ロイは今度はヴァジュラのいたところに向かって走り出し、転がり込んだ。当然、当たらない。
ロイは、ガトリング砲から大鋸へと切り替えた。そして、こちらを向こうとしているヴァジュラに向かって、さっき取り出した、手榴弾のような物を安全ピンを抜いて投げた。
ヴァジュラの目の前で、それは破裂した。　スタングレネードだ。

「グオオオォ」
ヴァジュラは苦しそうな声をあげる。どうやら、ヴァジュラの感覚は麻痺したみたいだ。　ロイはヴァジュラの目の前に来ると、大鋸の剣先をヴァジュラに向けて、力をいれ始めた。
すると、大鋸が引っ込み、代わりに黒い龍の顎(アギト)のようなモノが出てきた。顎は唸り、まるで獲物を前に歓喜をあげている様にも思える。
「喰らえっ！」
そう、ロイは言うと、顎は待ってましたと言わんばかりに、ヴァジュラの胴体に向けて、喰らい付き、肉を、骨を、皮を、裂き、砕き、引き剥がす様に、貪った。
ヴァジュラは、痛烈な痛みに悲鳴をあげている。悲痛な鳴き声が、周囲に木霊(こだま)する。
喰らい終わると、顎は引っ込み、大鋸が出てきた。　武器…神機(じんき)と呼ばれるその可変式の剣は何も変わらないが、ロイ本人は光を帯びている。
「行くぜ、相棒」
そう、神機に向けてつぶやくと、前とは比べ物にならない位の速さで、ヴァジュラに向けて大鋸を振るう。風を切る音と共に、肉を削り取る音が聞こえる。ヴァジュラは、感覚が戻った様で、雷撃を放ち、放電をする。
ロイは、それ等の攻撃を目にも止まらぬ速さで、すべてかわす。
ロイは、大鋸を担ぎ込み、力をいれ始めた。
「これで」
そして、その凶悪な黒いオーラを纏う巨剣を
「終わりだぁ！」
振り下ろした。
夕焼けも霞んでいる。　しかし、その光は綺麗なオレンジをしていた。それに照らされて、一人の少年…ゴッドイーターが、血まみれ

の、荒ぶる神を見下ろしていた…

vol. 2（前書き）

オリキャラが入ります

vol. 2

「報酬は、まずまずかな」
そう、誰にも当てられていない言葉を発した、布で出来た小袋を持った少年、ロイはつぶやいた。　小袋の中で、金属の擦れ合う音がする。
「何に使おうかな」
ロイはそう言うと、自室のドアを開けた。しかし…
「お疲レ～」
閉めてしまった。　確認すると…やはり、自分の部屋だ。
「幻聴と幻覚がするみたいだ…一応、博士にみせておこうかな」
そして、再びドアを開けたが、その幻聴と幻覚が消えることはなかった。
「なんで一回ドアを開けて、また閉めたのサ～。頭おかしいんじゃないノ～？」
「お前こそ頭おかしいんじゃないのか？常識的に」
「なんデ～？」
「普通、人の部屋には勝手に入らない」
そう言って、周りを見渡して何も盗られていないことを確認すると、頭を掻きながらベッドに座りこんだ。　綺麗な黒い髪が、ぐしゃぐしゃになる。周りには本が沢山落ちている。
「良いじゃン～、ぼく達の仲じゃないカ～」
部屋にいた、長身で金髪の青年が言う。
「親しい仲にも礼儀あり、って知ってる？まあ、そんなに親しい仲では無いけどね」
「この国の言葉～？素晴らしいネ～！」
「意味分かってないだろ！」
「エッ、分かっているに決まってるじゃないカ～。共通語だヨ～」
「じゃあ、今直ぐに出ていけ」

「それと、これとは別だヨ～」
どうやら、こいつは出て行くつもりはないらしい。
「早くお客様に飲み物でも出したらどうなんですカ～？」
「こいつ…」
勝手に入ってきたくせに、偉そうに飲み物まで要求してきやがった。
　こいつ…アレンは、ロイと同じ神機使いの青年だ。
　神機とは、ゴッドイーターと言われる職業の人が持つ、ニンゲンの天敵…アラガミを倒すための武器だ。　アラガミは、通常の武器だと、何をやっても死なない。　刃物をぶっさそうが、マグマに沈めようが、恐らく核ミサイルをぶつけようが、死なない。
　種明かしをすれば、アラガミと呼ばれる一個体一個体は、【オラクル細胞】と呼ばれる細胞の塊だ。
オラクル細胞は、【考えて喰らう】単細胞生物で、繋がりがとても強いため、普通の武器ではキズをつけるのは困難な作業で、つけたとしてもすぐに回復してしまう。ではどうするか、そこで、【神機】の登場である。神機は、同じくオラクル細胞を持った兵器である。その強い繋がりを断ち切るには、「喰いちぎる」しか、今のところ方法が無いんだ。　しかし、人間は神機から喰べられることは無いのか？　と言われると、無いとは言えない。
　神機にはオラクル細胞が入っている。普通の、何も付けていない人が触ると、捕食されて重傷を負う。　しかし、神機にも好き嫌いがある。ちなみにロイはフルーツ味のレーションが嫌いだ。
まあ、神機使いには、神機の嫌いなもの【偏食因子】と言われるものが入ってるらしい。…毎回投与されているけどね。
　とりあえず、神機＝アラガミを倒すための手段　、と考えてもいい。
それを扱うのがロイ達神機使いだ。
「早く飲み物ハ～」
「お前、客じゃあ無いだろ」
「それは良いから飲み物ヲ～」

「持参してこい」
「それは嫌でス～」
「じゃあ、我慢しろ」
「そんナ～」
ロイは立ち上がると、冷蔵庫にコーラを取りに行った。冷蔵庫の中から赤い缶を取り、プルタブを使い、開けて飲む。薬品の匂いが口いっぱいに広がる。ロイは、この味が好きだ。
「それでいいヤ～」
「　絶対にやらん」
ロイはそう断言したが、手にはもう一つ缶を持っていた。
「下さいって言えたら、あげても良いけどね。礼儀を知れ、礼儀を」
「下さイ～」
「ほれっと」
ロイはそう言い、アレンに向かって缶を投げた。
「ありがとウ～」
「お前の口から、その言葉が出るとは思わなかった」
「ロイ～、失礼だゾ～。この前お前が言ってたじゃんカ～」
「ああ、悪ぃ」
アレンは、コーラを飲み始めた。
アレンは、特殊な環境で育てられていたため、礼儀がなっていない。そのため、同期のロイが、色々と教えてあげている。
同期と言っても、まだ神機使いになってニ週間程度しか経っていないが…
その期間内に、ヴァジュラを単独で倒すことが出来るのは大変素晴らしいことで、普通は一ヶ月から二ヶ月は掛かる。
ヴァジュラを倒すことが、一人前の証とも言われている。
ちなみにアレンは、仲間と連携することで、初めて真価を発揮するため、単独で倒すことは難しいが、実力はロイと同じ位だ。
「早速だけどサ～」
そう切り出したのはアレン。

「何かサクッと倒しに行こうゼ～」
「えっ、今行ってきたばかりだけど」
「良いカラ、良いカラ～」
そう言うとアレンは立ち上がる。
「どうせなら、アリサとかコウタを誘おう」
「良いネ～、それは良イ～」
これで早く終わるな。そう思いながら、重い腰を上げてエントランスへと向かった。

vol. 2（後書き）

はじめまして、レイです。
突然ですが、何か意見をくれたら良いなぁーと思います。
何でも良いので、送って下さい。
それでは〜

vol. 3（前書き）

今回のは、ボルグ・カムランです。

vol. 3

「相変わらず、寒いな、ここ」
そうつぶやくのは、黒髪の少年…ロイ。
コートを羽織っている。耳当ても。　手袋も。マフラーも。カイロまで完備している。
お分かりだろうが、ロイは寒がりだ。
「全く、ロイは寒がり何ですね」
的を得た発言をする、少女…アリサは、銀色にたなびく髪を帽子で止めている。ちなみに服装は…
「寒そうだネ～」
アレンは言う。そう、アリサの服装はとても露出度が高く、最初は目のやり場に困る程。
「そうでもないですよ」
ソッ無く返すアリサ。
「雪国育ちですから」
イヤ、そう言う問題じゃあ無いから…と心の中で言う三人。
「そう言えば今回の相手は何だっけ」
話の話題を変える様にコウタが言った。
覚えとけ…と心の中で言う二人、あれ？一人足りない。
「そう言うのも覚えていないんですか？今回の相手はボルグ・カムランですよ」
口に出すなよ、面白かったのに…と心の中で言うロイ。
「余り喋らないネ～」
「そうですね。雪でもふるんじゃないでしょうか？」
「イヤ、もうふってるから」
ははは～、と笑う三人…あれ、一人足りない。
「寒いから余り喋りたく無いんだよ」
消えそうな声で言うロイ。

「さっさと終わらせてしまおうゼ～」
アレンはボルグ・カムランを探しに行ってしまった。
「しょうがないですね、コウタ！ロイ！行きますよ」
「……」
「おい、どうした、早く行くぞ」
「先に行っておいてくれ」
「どうした」
「暑いからコート脱ぐ」
「寒いんじゃ無かったのかよ！」
こうしてボルグ・カムランを探しに寒い寒い廃墟となった寺院をうろうろしてるのでした。

「おオ～、いたいタ～」
アレンはボルグ・カムランを見つけると、信号弾を打ち上げた。ここに集まってもらうためだ。
一番早く来たのはアリサだ。
「ほんとにいますね」
「ぼくを疑ってたノ～？酷イ～」
そんなこと無いですよ、とアリサは言った。
強く吹き付ける風は、悲鳴をあげる人の声にも聞こえる。
次に来たのはコウタとロイだ。二人は一緒に探していたらしい。
「もう寒く無いんですか？」
アリサは、ロイに聞いてみると、
「大丈夫、もう寒く無いんだ」
「もう慣れたんダ～、早いネ～」
「動くと暖まるだろ、だからだよ」
「そろそろ行こうぜ。早く終わらせてしまおう」
「ええ、そろそろ始めましょうか」
そして、四人はボルグ・カムランを追う。

ボルグ・カムランは、座りこんだ?様な形で無機物を喰べていた。
アラガミは、何でも喰べる。ビルだろうが人だろうが、何でも喰べる。
さらに厄介なのは、喰べていた物の性質を取り込んだ時だ。
例えば、ミサイルを取り込んだ時、そのアラガミはミサイルを発射することが可能になるかもしれない。
金属みたいに硬くなるかもしれない。
今のところ、見つかっていないがジェット機を取り込んだ時、空を自由に飛び回れることが可能になるかもしれない。
アラガミは、日々進化しているのだ。
「硬そうだネ～」
ボルグ・カムランは、鎧の様な金属質の外殻で覆われていて、とても硬く、生半可な攻撃は弾かれる。
おまけに弱点の口は、顔の様な盾で守られているため、銃撃でのダメージか、貫通属性の刀身で突き崩す位でしか攻撃は難しい。
攻撃方法は、主にしなやかな尻尾と、その先端に付いている針だ。
針は２ｍ～３ｍ位あり、突き刺さればこの世にオサラバしないといけなくなる。
地面に針を突き刺して、衝撃波を与える攻撃や、頭に付いている小さな針をミサイルみたいに飛ばす攻撃。
厄介な攻撃は、自身を回転させて尻尾で薙ぎ払う攻撃だ。
装甲…つまり、神機の盾で守るか、ジャンプで回避する以外に方法は無いに等しい。
こっちの攻撃方法は、脚を狙い、ダウンさせること。
ダウンさせると、敵は無防備になるため、攻撃のチャンスだ。
直接、口を狙撃するのも効果的だ。

「弱音を吐くな」
そう倒せない敵では無いのだから。
「作戦を説明する。まずは俺が突っ込む、ボルグ・カムランがこちらに気が付いたら、お前ら三人で撃ち崩せ。相手の動きを良く見て回避するように。以上」
そう言うと、ロイはボルグ・カムランに向かって走り出した。

vol. 3（後書き）

戦いは、次にでも…
では～

vol. 4（前書き）

ボルグ・カムランは、終了です。

vol.4

「オラァァァ！」
ロイは、無防備になっているボルグ・カムランの尻尾を斬りつけた。
ボルグ・カムランがこちらを振り向く前に、ロイは三回程尻尾を攻撃した。
「ガァァァァァ！」
こっちを向いてボルグ・カムランが威嚇する。
「今だ！やれ！」
ロイが合図すると同時に、光弾の雨がボルグ・カムランの口に降り注ぐ。
思わず怯んでしまうボルグ・カムラン、注意は完全にロイから外れ、アレン達の方にいってしまう。
ロイは背後を取り、また尻尾を斬りつける。
ボルグ・カムランは、たまらず盾を構えるが、尻尾は守りきれないため、その間も、ロイは尻尾を斬りつけている。
ボルグ・カムランは、とりあえず銃撃での攻撃を続けている、
三人に向かって突進する。
三人は、それぞれ違う方向へと回避すると、また銃でボルグ・カムランを狙う。
「これなら、余裕ですね」
アリサはそう言うと、銃から真っ赤な刀身に変えて、ボルグ・カムランの方にいってしまった。
「おい！引き換えせ！」
コウタがアリサを呼ぶが、アリサはそのままいってしまう。
「あ～ア、行っちゃったネ～。どうすル、コウタ～」
「あのまま放っておこう。どうせ、ロイもいるし」
「そうだネ～。放っておこうカ、めんどくさいシ～」

アリサは、ボルグ・カムランの正面に立つと、前脚を切る。
金属のはじく音がするが、切り続ける。
ボルグ・カムランは、盾を構えると体をねじる様な構えをとった。
アリサは、それに気付かない。
「アリサぁ！盾を構えろ！」
「えっ」
次の瞬間、アリサは宙に舞っていた。
理由は簡単、
強靭な尻尾で叩きつけられたからだ。
「ありゃりゃりゃ～、まア、助けてあげますカ～」
コウタ、よろしくネ～。とアレンは言うと、アリサを助けに行った。
「えっ、ちょっと待って、え、おれ、一人？」
絶叫してるコウタを放置して、アレンはアリサのところへと向かった。

アリサの状態は、打撲と肋骨を骨折程度で済んだ。
直撃した割りには、軽傷だった。
この程度なら、大丈夫かな。
アレンは、アリサの肩を叩き、
「起きなヨ～、アリサ～」
声をかける。すると、
「油断してしまいました…」
アリサが立ち上がる。　今まで立ち上がることが出来なかったのにもかかわらず。
これは、リンクエイドという行為で、倒れて力尽きた神機使いを助けることが出来る。アレンは、衛生兵と言われている、いわゆる戦う医者みたいな職業だ。普通は、前線には立たず援護等をしているが…

ゴッドイーターは違うようだ。
前線に立って、仲間諸共吹き飛ばすひともいる。衛生兵なのに…
とにかく、衛生兵は治療も御手の物なので、仕事が早い。
衛生兵に救われたひとも少なくない。
「じゃァ～、ぼくも混じろうかナ～」
アレンは、狙砲から、短剣みたいな刀身に変えた。
パッと見てレイピアっぽい。
「アリサ～、援護よろしくゥ～」
ボルグ・カムランに特攻しているかのように
走り出す
そして、
ボルグ・カムランの
口を貫いた。
「ガアアアア？」
ボルグ・カムランの叫び声が、静かな雪景色に消える。
それと同時に、ロイはボルグ・カムランの

尻尾を斬り落とした。

「ギャアアアアアァ？」
ボルグ・カムランは、悶え苦しんでいる。
周りの雪が赤黒い色に染まっている。
「ウソだろ…」
コウタは、唖然としている。しかし撃つのはやめない。
「今だ！コウタ以外は剣で攻撃しろ！」
ロイは、そう皆に指示すると、刀身から黒い顎（アギト）を出す。
「隙だらけだぞ」
そして、喰らった。
鮮血が飛び散り、点々と、白い雪に色をつける。

二人もロイ同様に、
「喰べちゃエ～」
「喰らえっ！」
ボルグ・カムランを喰らうと、すぐさま銃身へと変えて
ロイに銃口を向ける。
「渡すネ～」
「外さないで下さいね」
そう言うと、銃口から光る弾が出て来てロイに当たる。
「ありがとう、二人共」
ロイに着弾すると、ロイの身体が光り輝く。
ロイは、銃身へと流れるように、変形させる。
そして、銃口をボルグ・カムランに向ける。
ボルグ・カムランは、動けない、チャンスだ。
「くたばれ、化け物」
ロイは、引き金を引いた
次の瞬間、巨大な、５m位は有る針が、
ボルグ・カムランへと突き刺さった。
反動で、ロイは少し後ろに下がったが、ボルグ・カムランは、そのまま後ろに吹っ飛んで、動かなくなった。
「ふう、終わった」
ロイは、そうつぶやく。突き刺さっていた針は、消えてしまったようだ。
今の巨大な針は、濃縮アラガミバレットといい、アラガミバレットとは、アラガミを黒い顎…【捕食形態】（プレデターモード）で、生きたアラガミを捕食すると貰える便利な物で、基本的にアラガミの力を奪い取り、使うということをしているだけなので、余りダメージを与える事は出来ない。
しかし、相手に受け渡す事で、濃縮されて威力が増す。
最高レベル３まであり、それ以上は制限されている。
「よし、素材取るぞ」

そう言うと、ロイは、プレデターモードにして
ボルグ・カムランの死体に喰らい付き、もぎ取る。
もぎ取った物は、コアといい、これを持って帰る事が
ゴッドイーターの仕事なのである。
「うーん、微妙」
余りいいものは、取れなかったようだ。
「さあ、帰ろう。用も済んだしね」
ロイは、帰ろうとするが、
「おいロイ！コートはどうした？」
コウタが呼び止める。「あっ、…どっかに置いて来た…」
「何やってんだ（ですか）！」
こうして、寒い中でロイのコート探しは、始まった…

vol. 4（後書き）

続き…

アリサ「あっ、見つかりました！」

ロイ「えっ！どこ」

アリサ「ほら、あそこ！」

アレン「雪だらけだネ～」

コウタ「ドンマイ、ロイ」

ロイ「うわあ、ビショビショ」

ロイ「あと、コウタに励まされてしまったのが悔しい」

コウタ「おい！それどういう意味だよ！」

ロイ「そのままの意味だよ」

vol. 5（前書き）

ロイの私生活、発覚。

vol. 5

「あーあ、疲れた」

ロイは、帰ってきての第一声を発した。その手には、布地の報酬袋が握られている。中に入っているコインは、少なくはないが多くもない。何を買おうか、とつぶやく。

「今日はもうミッション、行かなくていいや」

そう言って、自室のベッドに身を投げる。ふかふかしてて気持ち良い。　ロイの部屋は、比較的には片付いている方だ。金属製の床には、ゴミ一つ落ちていない。だが、同じく金属製の棚にはコーラの缶や、単行本等が散乱している。ベッドの上にも本が散らばってる。

「コーラでも飲みながら、本でも読もうかな」

ベッドから立ち上がる。そして、入り口付近にある冷蔵庫に手を伸ばす。中にはコーラの缶やレーション、液体火薬…など、バリエーションに富んだものとなっている。　液体火薬は、何時も持ち歩いていて、
ポーチに入っている。

コーラを取り出すと、ロイは早速缶を開けた。　シュワシュワと泡立つ音がするそれを、一口飲む。口の中ではじけて爽快感が増す。
やはり、ミッション後はこれに限る。

「そういえば、まだ途中で読み終わっていない本があったよな？今日はそれを読もう」

ロイは、缶を棚に置くとベッドに飛び込む。シーツがぐしゃぐしゃになるが、気にしない。　棚にあるコーラと本を取り、ページを開く。
ロイは、読書が趣味だ。明るい話よりも、暗く、悲観的な方が好きな方だ。このご時世に、変わっているとロイは思っている。

「ジーナから借りてきていたっけ、この本」

ジーナとは、色々と気が合う。本の趣味でも、気が合う。ロイは、コーラを手にするが滑ってしまい、零してしまった。当然、シーツはコーラ色に染まってしまう。借りた本は、無事に終わった。

「…、今日は乾かすものが多いな」

ロイは、シーツを水で良く洗うと洗濯機に入れる。　数分後、綺麗なシーツが洗濯機の中にあった。　ロイは、手際良く取り込む。床のタイルが水浸しだ。　乾燥機にいれようとするが、先客がいた事を思い出す。　そう、コートだ。　コートを取り出すと、シーツを乾燥機にぶち込む。スイッチを入れた。　ロイは、コートをハンガーに掛けようと、歩き出す。転んだ。　タイルは、水浸しだった。

ロイは、新しいシーツを敷いたベッドにスライディングする。シワ一つ無いシーツが、見事にぐしゃぐしゃに。そして、本を読み始めた。
ロイの頭には、ガーゼが付いている。　黒い髪は度重なる苦悩とイライラで、ボッサボサとなっていた。　掻きむしったのであろう。

ロイの癖だ。ストレスが溜まれば溜まる程、ボッサボサ度（？）は上がる。見ている方は便利だ。　一時間経つと、ロイは本を読むのをやめる。自分のルールで決まっているからだ。

「何か、買いに行こうかな。コーヒーも切れていたし…」

ロイは、ベッドから出るとドアに向かった。ドアは、センサーが付いているため、ロイを感知すると開いてくれた。ポーチには、今日の報酬が入った財布がある。　目的はコーヒーなので多くは持ち歩いていないが、３０００ｆｃくらい入っている。　ｆｃ（フェンリル クレジット）とは、今使われているお金の単位で、世界を牛耳っている【フェンリル】と言う元、製薬会社が発行している。　フェンリルは、アラガミを独自に研究してオラクル細胞を見つけ、特許を取り、世界中に支部を置いている。　ゴッドイーターや、ゴッドイーターの神機を研究したり、作ってみたりしている。アラガミの研究もしている。
まあ、要するにお金ってことだ。

ロイは、早速万屋へと足を運んだ。　エレベーターに向かう途中で、アレンを見つけたから、挨拶すると、無視しやがったから蹴りを入れた。壁がへこむ。

「挨拶ぐらいしやがれ！」

アレンは、すぐさま謝った。ごめんネ～、と言う。理由は、単純、且つ明確だった。　髪の状態を見たからだ。　本当に便利な癖だ。いくら礼義正しく無くても、謝る。怒らせると怖いから。
アレンは、へこんだ壁に手を当てて歩き出す。目的地は、変更された。　医務室だ。

「買ったコーヒーは、ダンボールに入れといて下さい」

万屋のおじさんにそう言うロイの髪は、だいぶ収まっていた。ストレスは、発散させたらしい。　万屋のおじさんから、コーヒー入りのダンボールを受け取ると、財布から１０００ｆｃ出して渡す。お釣は良いです。と、ロイは言う。　そして、部屋に戻る。

「さあ、そろそろ寝るかな」

そう言ってベッドに横になると、明かりを消して掛け布団を被る。枕を置いて顔を埋める。至福のときだ。　少し経つと、仰向けになる。

「おやすみ」

つぶやくように言うと、ロイは、夢の世界へと飛び立っていく…

vol. 5（後書き）

アレン「いてテ、やっぱりロイを怒らせると怖いネ～」
胸と腹部に包帯を巻いたアレンが、医務室のベッドの上で嘆いていた。

vol. 6（前書き）

伏線があります。

vol. 6

ここは、夢の中です。
ここに一人の小さい幼いロイと、たくさんの子供達がいます。皆、同じ年頃です。見た目は、１０代前半の子供達です。　遊んでいます。　ロイも、その中に混じって遊んでいます。楽しそうです。ここは、孤児院です。　孤児院だったところです。悪夢が舞い降りるまでは。

ロイは、一人の女の子と特に仲が良かったです。周りは冷やかしますが、気にしません。手を繋いで歩いたり、一緒に寝ちゃったり、二人共仲が良かったです。両思いでした。

女の子は、本を読むのが好きでした。ハッピーエンドで終わるお話が好きな女の子でした。ロイも本が好きになりました。最後が、幸福で終わるお話が好きになりました。　そして、女の子を好きになりました。　伝えられず、終りました。

悪夢が、来たから、です。

二人共本を読んでいる途中で、外から悲鳴が聞こえました。窓から様子を見ると、子供が数人死んでいました。血がいっぱいでました。悪夢は、黒い？を口から放出して、全てを焼き払いました。いっぱい燃えました。孤児院も燃えました。急いでロイ達は、窓からでました。次の瞬間、孤児院は爆発して、消えてしまいました。黒い？だけが残っています。二人共服を汚していました。女の子の金髪も、ロイの銀色の髪も、煤(すす)で汚れていました。悪夢は、こっちを向きます。そして、

大きな爪で
女の子を切り裂いてしまいました。
ロイは、悲しみました。彼は、泣きました。でも、悪夢は迫ってきていました。　ロイは、悪夢に向かって走り出しました。
そのあとロイはどうなったのか解りません。ただ、身体はとても強いものになっていて、悪夢は姿を消しました。女の子はいなくなってしまいました。そこには、孤児院は在らず、焼け野原が広がっていて、ロイがいました。黒い髪の、ロイがいました。
　そして、
この世界に、元の大人しいロイを知る者は、一人以外消えてしまいまったのです。

「うわあああああ！」
ロイは目を覚ました。油汗で、身体中べとべとだ。ロイはとりあえず呼吸を整える。　あとでシャワーを浴びよう。そう思ったロイはひとまず洗面所へと向かった。
「久しぶりに、夢を見たと思ったら、これか…」
ロイはシャワーを浴びながらつぶやいた。黒い髪から水滴が滴る。朝から気分は最悪だ。一番思い出したくないものを、夢で見てしまったからだ。　バスから出ると、タオルで身体中を拭いた。髪もぼさぼさになるが、決して不機嫌では無い。着替えると、一人の人が

訪ねて来た。　リンドウさんだ。

リンドウさんは、ロイやアリサ、コウタのいる第一部隊の隊長だ。
　他にも、防衛班と呼ばれている第二部隊やアレンのいる第三部隊などがある。　隊長と呼ばれている人は、普通に考えると分かるが、一人だ。その隊長の中でも特に支持されていて、親しまれている。偉そうな素振りを見せないし、人柄も良いからだ。

「何か用ですか？リンドウさん」

ロイは、問いかける。

「早く準備を済ませてくれ。話は、それからだ。エントランスで待っている」

そうリンドウさんは真面目に言うと、スタスタと去って行った。ロイは急いで準備を済ませ、エントランスへと向かう。急いでいると人間は早足になるらしい。

リンドウさん達は、集まっていた。でも、新人のアリサや、コウタがいない。ソーマとサクヤさんだけが集まっていた。
　ソーマは問題児で、命令違反や、単独行動などを起こしている。頻繁に…でも、ロイとは結構気が合うらしく、たまに一緒に飯を食いに行ったりする。
サクヤさんは、リンドウさんの幼馴染で密かでは無いが想いを寄せている。叶えば良いな、とロイは思っている。
ソーマや、コウタ、サクヤさんの使う神機は、旧型と言う神機で、刀身と銃身の切り替えが出来ない。　ソーマは、漆黒の鋸（のこぎり）で、サクヤさんは白い狙撃銃だ。　二人共ベテランで、ソーマは６年、サクヤさんは、ゴッドイーターになって３〜４年になる。　ソーマは１

８歳だが、若冠１２歳でゴッドイーターになった。すごいと素直に思う。

「よし、じゃあ話すぞ。今回討伐する敵は、ウロヴォロスだ！」

「はあ？」　「ええっ？」　「マジかよ…」

左からソーマ、サクヤさん、ロイの順番。

さて、どうなる…

vol. 6（後書き）

伏線はあとで必ず拾います。

vol. 7（前書き）

ウロヴォロスです。

vol.7

「やっぱり、雨が降ってる」
ロイは、手のひらを上に向けて空を仰いだ。ポツポツと、止むことのない雨が降っていてロイの手のひらに水を落とす。冷たい。ここに来るのは三回目だが、雨が止んでいたことは一度もない。ソーマに聞いても無かったそうだ。

ここは、嘆きの平原。永遠と雨が降り注ぎ、平原だったところの中央に、大きな螺旋の様な竜巻がそびえ立っている。ウロヴォロスは、ここにいる。　話を聞いたところ、とても大きく、まるで山が動いているみたいだと言う。強いのかな？そいつ。

「よし、付いたみたいだな。早速、作戦を説明する」

リンドウは、言った。緊張して、声が震えているみたいだ。…らしく無い、何時も気楽でヘラヘラしている方が、似合う。

「正直、お前らを守りきる自信がねえ」

「おれ達は、そこまで信用してもらって無いみたいだな」

ソーマは、皮肉るように言葉を発した。ロイも、同感だ。　なぜ連れて来た？と、ソーマは、リンドウに問いかける。

「経験を積んで欲しいのが１つ。そして、お前らを連れて行くと、戦力になると思った。それが、もう１つだ」

リンドウは、笑う。それを聞いてロイは安心した。信用は、されて

いるみたいだからだ。ソーマも、当然だ、とリンドウさんに返す。サクヤさんは、周りを警戒しているみたいだ。　俺も、敵がいないか見渡す。

「サクヤがバックアップ、俺とソーマは足下を崩す。ロイは遊撃だ。好きにしろ」

ロイは短く、はい、と返事をするとリンドウは、おう、と答えると戦場となる平原に降りて行った。ロイやソーマ、サクヤもそれに続く。降りてみると、地面はぬかるんでいないようだったので、安心した、本気でやりあえるからだ。　ロイは、ソーマと一緒にウロヴォロスを探しに行ったが、後ろから発砲音が聞こえたので、急いで駆け付ける。

行ってみると、戦いは始まっていた。ウロヴォロスがリンドウに突進している。速さは、身体が大きいせいか遅く見えたが、とても速い。あんな巨体に踏み潰されたら、ひとたまりも無いだろう。リンドウは、ステップで軽やかに回避する。　さすがベテラン、動きが良いな。ロイはすぐに視線をリンドウからウロヴォロスに変えた。

背中に翼の様な飾りみたいな意味の無さそうなものが生えていた。なぜ？

ロイは無言で神機を銃身に変えると、撃った。　神属性の銃弾が効果的だとターミナルに書いていたので、神属性の銃弾を撃った。ウロヴォロスは、こっちの存在を確認したみたいだ。顔をみると、口や顔は無くて複眼らしきものが、顔一面に付いていた。角も生えていた。

「ヴォオオオォ」

ウロヴォロスは吠える。ロイは、ウロヴォロスはこんな声が出るのか、と驚いていた。平原には、何時もの雨が滴る音以外に、肉を切り裂く音や、銃声が鳴り響いてる。ロイは、複眼に銃弾を当てまくると、目は潰れていった。すぐに治るだろうと判断したロイは、ウロヴォロスの懐に潜り込むと、触手を斬る。ウネウネしてて、気持ち悪いが、我慢だ。すると、触手が上に上がって行くのが見えた。

リンドウは、離れろ、と呼びかけると、足下から消える。ロイやソーマも同じように離れると、ドシン、という音と共に振動が響く。ウロヴォロスが、跳ねたのだ。あのままだったらどうなっていたのだろうと思うとゾクっととする。

「顔を重点的に攻撃してみよう。とりあえず、あの角を落としてみるかな」

ロイは独り言のようにして言うと、ウロヴォロスの顔付近に移動した。ウロヴォロスがこっちの存在に気付くと身体全体を使ってのしかかって来る。慌てて回避するとロイは刀身で、顔をずたずたに切り裂く。ウロヴォロスが怯んだがロイの攻撃は終わらない、ウロヴォロスの角に凄いスピードで四回もの攻撃を当てると、終わりだと言わんばかりに角に向かって大鋸を叩きつける、角が砕け散った。ウロヴォロスの体液がそこら中に飛び散り、地面の雨水を血の色に変える。

「グヴォオオオゥ！」

ウロヴォロスが悲鳴をあげるが容赦なく顔面を切り裂く、あまりの攻撃にウロヴォロスの顔は酷いことになっていた。一言で言うと、ボロボロで可哀想に思えて来る。あ…二言だった。　ソーマやリン

ドウは、相変わらず足を狙い、切っている。　一旦、ロイは離れる、深追いは禁物だ。　ウロヴォロスが怒号をあげるように呻き声の様な声を出す、周囲の空気が震えている。

「ヴォオオオォ！」

目の水晶体が光っていて、ウロヴォロスで無かったら綺麗だと思うだろう。　雨でキラキラと乱反射している。　ウロヴォロスは、触手を支えに立ち上がるようにして俺たちを見下ろす。何してるの？こいつ、とロイは思っていると、地面がいきなり盛り上がり、何か出て来た。　ビックリして後ろに回避すると、ロイのいたところに今まで無かった棘が生えていた。休んでいる暇は無いみたいだ、ロイのいる地面がまた盛り上がりロイを串刺しにしようと棘が生えて来る。　これを三回繰り返すと、ウロヴォロスは触手を抜き始めたので、

「よし、チャンスだ！」

そう言ってウロヴォロスの触手に、にロイは斬りかかる。ブチブチと繊維の千切れる音がする。血がそこから吹き出し、ロイにかかるが、雨で流される。　ウロヴォロスはもう一度、立ち上がる。　俺に棘を刺そうとすると、自分にも刺さるはず、だからウロヴォロスは俺に攻撃はしてこない。とロイは思い、攻撃を続ける。しかし、リンドウから予想していなかった言葉が飛び出した。

「早く装甲を構えろ！」

そうリンドウは、叫ぶようにして言うが既に遅かった。ロイは斬りかかっているところで、ええっ！と言うような顔でこちらを見ている。やってしまった…ちゃんと教えとけばよかった、これは教えた

筈だったんだが。リンドウは、思い返す。

「スタングレネードにも似た、発光攻撃を繰り出して来るから要注意だ。触手を地面から突き出して来る攻撃とモーションは同じで、怒らせるとして来るからな、分かったか？」

「ああ」　「ええ、分かったわ」

横からソーマ、サクヤの順番。今はヘリの中だ。神機使い達は基本、ヘリコプターでミッションに行く、空中にはあまり敵はいないからだ。ヘリの運転は専門の人…つまりパイロットがしていて、送り届けたら帰り、終わったら迎えに来る。
リンドウは、一人の少年の声が聞こえなかったことを今思い出す。そう、誰もがお判りだろうが、ロイだ。そう言えば、付いた時寝てたな…

「そういやあ、あの野郎、寝ていやがった！」

あのバカ、一旦、立て直すかと考えた時、凄い光りと音が聞こえた。ホント、スタングレネードに似てるな。とリンドウは思ったが、すぐにロイの様子を確認する。フラフラしているところを見て、スタンにかかったと判断した。　スタンとは強い光や、ある攻撃を食らうことで発生する状態異常のことで、無防備な状態となるので大変危険だ。　ロイは、未だにかかっている。
ウロヴォロスが突然身体を回転させたと思ったら、触手でロイを叩き飛ばした。強力な、回転攻撃だ。普通に食らうと、とても痛いとリンドウは、自分の経験で皆に話をしていた。ああ、死んだな。
サクヤは、悲鳴をあげていて、ソーマは無表情だ。　…えっ、無

表情？

ロイは、立ち上がった。　いきなり光ったと思ったら、クラクラするし、なんか吹き飛ばされるし…散々だな。そう思いながら腰を上げた。　いてて、なんか痛いな。ロイはポーチに手を入れると、回復錠を取り出す。　これは、怪我を緩和する特効薬みたいなものだ。

「さあ、第二ラウンドと行こうか」

ロイは回復錠を飲み込むと、ウロヴォロスの近くまで風の様な速さで近づく。泥水が跳ねるが気にしない。そして、触手に大鋸を叩きつけた。

vol.7（後書き）

次回、決着です。

vol. 8（前書き）

これでウロヴォロスは終わりました（笑）

vol.8

「まさか立ち上がるとはな…若いのは元気で良いねぇ」

ロイを見ながらリンドウはそう呟く。　ソーマは分かってたのか、とリンドウはソーマが無表情だったのを納得した。ソーマは、ウロヴォロスの足を切り刻む。怒らせるとウロヴォロスは足に加える攻撃がとても有効になる。

「良い友達が出来たじゃねえか」

ソーマは、いつも一人だった。真の理解者はリンドウとサクヤぐらいで人を寄せ付け無かった。　ソーマとミッションに行くと、ソーマがだいたい強いので周りの人間が死んでいった。強い奴が生き残る、それは当たり前のことだが、人間とは思えないくらいの実力と力を持つソーマは、人々の畏れの対象となり「死神」と呼ばれ、敬遠されてきた。　ソーマも自分自身のことを「化け物」と呼び、あまり人と接することは、無かった。　リンドウは、分かっていた。ソーマは、人が死ぬのが見たく無いから人を遠避けていたことを。

だからこそ驚いた。

「あいつが認めた奴だからな、あれで当然か。おれも、うかうかしてたら抜かれるな」

リンドウは走り出した。ウロヴォロスの足下に潜り込むと神機を振るう。　リンドウの神機は、赤いチェーンソーだ。とてもカッコイイ。リンドウは、ヒット&アウェイを繰り返して、着実に足を斬っている。ウロヴォロスが追うが、サクヤが牽制するようにレーザーを撃つ。

ロイは、戦線から一時離脱して戦況を見た。サクヤのレーザーがウロヴォロスの胴体を貫いたり、ソーマは顔を、リンドウは足を斬っている。　ウロヴォロスは、サクヤを標的にしてレーザーを発射する。とても凄いエネルギー量だが、サクヤは冷静に回避する。
一気に決めるか、そう決めたロイは、

「スタングレネードを投げるぞ！」

そう高らかに宣言するようにして言うと、スタングレネードを直線で投げた。ウロヴォロスの同体に当たると、バンッ！　と甲高い破裂音が鳴り響き閃光を出す。暗い平原が、一瞬明るくなる。

「？ぉおお！」

ウロヴォロスの驚く様な声が出る。成功したようだ、ロイは安心して走りながら神機をプレデターモードにする。黒い顎が出るが、獲物を前に落ち着けないようだ。今にも喰らいそうだ。
ロイは、顎をウロヴォロスの胴体に目掛けて喰らわせた。血肉が染み出てぐちゃぐちゃになり、それを削るようにして顎を引いた。傷口が、生々しく残っている。

ロイが降り立つと今度はソーマが飛び、傷口に大鋸を突きつけると、そのまま突き刺した。突き刺したソーマは必至に神機にしがみついている。ロイは、銃身に神機の姿を変えるとソーマに向かって１つの弾を撃ち出した。ソーマに当たると、まるでアラガミを捕食した時のように力が湧いてくる。　　これは、リンクバーストと言うもので、アラガミバレットを受け渡すと相手側がアラガミを捕食した時と同じようになる。新型限定の要素だ。　　ロイは、これをサクヤにも渡す。　サクヤは、普段味わうことの出来ない感じに違和感

を感じているが、悪く無いらしく、ありがとう、とお礼を言ってきた。もう1つ追加する。

白い髪に、褐色の肌をもつフードをかぶった少年は、自身の刺したままの神機を下に振り下ろした。傷口が広がり、血が滴る。そして少年は、一緒にいた黒い髪の少年と共に下がる。黒い髪の少年は、声を掛ける。

「ソーマ、ナイスだぜ」

ソーマは、フッと笑みを返すと前の敵に集中した。ロイもウロヴォロスを見る。　すると、あの大きな巨体が力無く倒れこんだ。ビックリした。

「わりぃ、おれが倒した」

中からリンドウが出てくる。押し潰されて無かったんだね、と二人共思う。　ロイは、空を見上げると

「あっけないな…」

呟く。しかし、ソーマには聞こえていたらしく

「全くだ。おいしいとこまで全部持って行きやがって」

しかも言いたかったことを全部言ってくれた。リンドウは、しょうが無いだろ、と言っている。　サクヤは誰一人欠けること無く終わり安心しているようだ。リンドウが、ウロヴォロスのコアを回収すると

「さあ、帰るぞ。帰るまでがミッションだからな」

遠足かよ、そう思いながらもリンドウに付いて行く。帰ったら一緒に飯でも食べようとソーマを誘う。　空は、晴れること無く雨を降らしていた…

vol. 8（後書き）

オマケ…
スタングレネードを直線で投げた。ウロヴォロスの同体に当たると、
バンッ！　と甲高い破裂音がして…中に入ってしまった…
ロイ「あれっ？」
そして、少し揺れると完全に止まる。
ウロヴォロスを捕まえた！
ソーマ「おいっ何してる！」
ロイ「知らねーよ！つーかこれってポケモ…」
サクヤ「全部言っちゃダメよ！」
リンドウ「まあ、どうする？」
一同「どうしよう…」

後は、想像に任せます。

vol. 9（前書き）

ロイは、基本的にはチートなのでストーリーとミッションは噛み合いませんが、アレンは一緒です。

vol.9

「えっと、本当に俺で良いんですか？」

「ああ、そうだが。不満かね？」

そうシックザール支部長は言う。シックザール支部長は、ここ極東支部で１番偉い人だ。

「君がこの極東支部に来てからのアラガミ討伐数の上昇率を知っているかい？２５％も上がった。これは初の快挙だ！本部の重役達も目を疑っているよ。

しかし、ほとんどの神機使いの出動回数はあまり変わっていない。おかしいと思わないかい？私も思ったさ。だから調べてみると、君の出動回数が他の３~４倍も多かった。

更にはヴァジュラも単独で討伐、先程のウロヴォロス戦では主力として勝利に貢献していたそうじゃないか？

それほどの逸材に任せない訳が無いだろう？」

うざったらしい話をどうもありがとうございます。

この話を聞く羽目になったのは、数十分前のこと…エントランスで、リッカという腕の良い整備師にアラガミを倒すためにスタングレネードを作って貰っていた時の事だった…　整備師とは主に神機の製造、及び整備をこなしている。

「あっ、ロイさん。支部長が呼んでいましたよ。見かけたら声を掛

けてくれって」

そう言うのはヒバリ、受付嬢だ。神機使い候補に名前があるのだが、十分な適合率のある神機が見つかっていないため、受付嬢をやっている。受付嬢は、ミッションの受託や報酬の受け渡し、緊急時の連絡も任されている凄い人だ。　…これが引き金だったのだ。

ロイは、リンドウさんを真似て、

「じゃあ、見なかったことにしてくれ」

あの時、曖昧な返事をして放っていればこんな事にはならなかった筈なのにな…　それを聞いていたのは、鬼教官。

「それは関心しないな、わたしが連れて行ってやろう」

ツバキさんだった…　凄い美人でリンドウの姉さんだが、性格はちゃんとしていて、とても怖い。あのヒールの音を聞いた柄の悪い神機使い達は、裸足で飛び出すと言う…　ロイは、リッカからも勧められてツバキに支部長室へと連れて行かれたのであった。

…以上である。

「それにしても誰がそんな事言ってくれたんですかね？」

俺は犯人を聞く。

「リンドウくんだよ」

リンドウさん、信じてたのに…

「ソーマはどうなんです？古株ですし、実力も申し分無いだろうかと思いますが」

「ソーマには前からして貰っている」

ハイハイ、さいですか。

「俺に出来ますかねぇ？」

「何度も言っているだろう。適任だと」

「きみには今日からでも特務をやってもらう。基本は一人だが、同行者を連れても良い場合はこちらから伝える」

特務とは、シックザール支部長から直接発行される特殊な任務で、任務の隠密性と特殊性から、特務を課せられるのはシックザール支部長の信頼を得た一部の神機使いのみである。代表的な特務としては「特定のコアを奪取する」などが挙げられ、その性質上、場合によっては単騎で特務にあたる必要があるため、一人で行く事になる。

これにロイは選ばれたのだ。

「給料は、弾むが？」

「やります！」

金に釣られる。

「よし、それでは今から極地に適応したクアドリガのコアを奪取して来てくれ。恐るべき早さで進化し、極地に適応した結果、かえって高熱への脆さを背負った種族…興味深くはないかね？」

いや、ぜんぜん。と心の中で言っておく。アラガミのことなんて知るかー！炎に弱くなっただけじゃあねえか！

「まあ、一応炎の弾丸は持っておきます。では」

「気を付けて行って来てくれ」

少しも思って無いくせに。そうリンドウは心の中で呟いた。

「あれっ？リンドウさん居たの？」

「ひでえな、お前…　いやー別用で呼ばれてんの、おれは」

「ちなみに何時からですか？」

「支部長とお前が口論してた所から。お前はまだ支部長には勝てねえよ。口喧嘩では」

「そんなに？」

「ああ！あの人は量で攻めて来るからなぁ。しかも静かな戦い方をする、決して怒鳴らねぇから後味わりぃんだ」

リンドウは髪を掻く。この人も癖はあるらしい。

「私の陰口は、私のいないところでしてくれないか？」

「「はい…、すみませんでした…」」

そう言って、ロイとリンドウは支部長室から出て行ったのであった…

「リンドウくんは残っていてくれ」

逃走失敗…リンドウは残念そうに戻って行った。後で長々しく話を聞かされるのであろう。内心、ざまあみろ！と思っているロイでした。

「野暮用は、ちゃっちゃと終わらせますか」

ロイは、エントランスへと足を運んだ。…リッカからスタングレネードをもらうのを忘れずに。ちゃっかりしてます。

vol. 9（後書き）

オマケ

アレン「……」
アリサ「アレン、元気出してください」
アレン「主役なのにこの仕打ちは酷いヨ～」
コウタ「少しの我慢だぞ。絶対に次は出すって言ってたからな」
アリサ「コウタ、あなたは抜かされる。とも言ってましたよ」
三人共「はあ～」

vol.10（前書き）

一時の休息…

vol. 10

「エッ？」

「え？　じゃあ無えよ！ミッション行くぞアレン。今回は使えないコウタを置いて行ってジーナを連れて行く」

「コウタが使えないって、幾らコウタでも可哀想ですよ。どうしたんですか？」

アリサは、ロイに尋ねる。

「あいつ、第三部隊と一緒にミッション受けやがった。だから代わりにジーナを借りてきたってわけ」

「借りてきたって酷くないかしら？」

ぶっきらぼうにアリサに答えるロイにジーナは異義を唱える。ロイは渋々謝る。

「まア、コウタには悪いけどこっちが戦力になるネ～」

アレンは、正直な気持ちを告げる。実際、ジーナの方が実力も経験も上なので、仕方無い。ジーナは5年間生き延びてきたベテランなのだから。　ちなみにジーナの神機は、サクヤと同じライフル型の狙撃銃で、レーザーを多用する。

「早く行きましょう！」

「そうだな、さっさと終わらせるに越したことは無い。各自、準備を始めてくれ」

ロイはそう言うと、鉄の壁に阻まれている神機の保管庫に移動した。他のメンバーも後に続く。金属でできた扉が重々しく開く。神機は、生物兵器に近い。神機使いとリンクさせて始めて効果を発揮する。そのため、かなりデリケートで整備を欠かさず行わなければいけない。

「あっ、ロイ君！大丈夫だった？」

「おかげさまで、とても疲れたよ。全く、酷いね」

整備師のリッカだ。人員は多い整備班だがリッカは優秀なので休みはあまりなく、仕事熱心だ。そのため、オシャレなどには関心が無くて顔にはオイルの付いたグローブで拭いた後が残っている。

「で、何の用事だったって？」

「秘密だよ、ヒ・ミ・ツ！」

特務の事は、他言してはならないため話さない。勿論、メンバーにも言って無い。言ったら首が飛んで行きます、リアルで。受付嬢も閲覧することは、出来ない。それぐらい重要なのだ。

「はい、ロイ君の神機」

サンキュー、とロイはリッカに言う。リッカはどうも、と嬉しそうに返す。その様子をみていたアリサは…

「ロイったら、いつまでイチャついてるんですか？まったく…」

「妬いてる？」

「ぜ、全然違います！かっ、かっ、勘違いしないでください！」

慌てふためくアリサをみて、ジーナはフフッ、と微笑む。アリサは顔を真っ赤にしてジーナになにか言うが何を言っているか分からない。普段、肌は白く透きとおっているのに赤に染まっている。

「うン、これで良いかナ～」

アレンは、一心不乱に神機のチェックをしている。彼の細めの刀身が、白く輝いている。ジーナも自分の神機を手に取って確認している。　真剣に神機を見つめるその目は、吸い込まれてしまいそうな程、綺麗だ。

「そろそろ行く？」

ジーナが皆に問いかける。ロイは既にヘリに乗り込んでいるので、その場にはアリサとアレンしかいない。　２人共返事をすると、ヘリに乗り込んで行く。ジーナは、その後を追う。

「ジーナは、その服装での戦闘は大丈夫なの？見えるかもしれないけど…」

ジーナの服装は胸が開けていて、すぐにでもその下が見えそうだ。

「見てみる？それとも控えめなのは嫌い？」

「いや、そう言う訳じゃあない」

ジーナの胸は、他の人と比べて小さい方だ。アリサはけっこうあって、サクヤとツバキは言うことのないくらい大きい。ちなみにリッカとヒバリは人並みだ。

「ロイをそんな貧相な体で誘惑しないでください！」

アリサは大声で荒げる。　ジーナは今のにカチンと来たらしく、

「貴方は食事の誘いすら出来ないじゃないの。それとも、妬いてるだけなのかしら？」

「だから妬いてません！」

アリサは事実を言われてショックそうだ。実際、誘えた試しがない。

「ねえ、ロイ。帰ったら一緒にディナーでもどう？」

「ん？ああ、良いよ。一人で食べるのも…と思っていたからな」

そう笑ってロイは返事をした。自然な感じで夕食の約束をしたジーナをアリサは信じられないと言う様な顔でみていた。

「これが、経験の差よ」

ジーナの小さな顔には笑みが浮かんでいて、隻眼を紫色っぽい髪から覗かせている。ジーナは眼帯をしているが、違和感は無くて自然である。ああ、負けた…アリサはうなだれる。

「でも…負けません！」

固く決意したアリサ。目には闘志がみなぎっている。すんごい迫力だ。

アレンは、平和そうに昼寝していたのであった。決して空気になっていた訳ではない。

vol.10（後書き）

このペースで更新しようかと。

vol.11（前書き）

すんません、久々の投稿っす。

vol. 11

「ケンカは良いからさ、早く降りようぜ二人共。相手が待っている」
ロイは、ヘリの中でケンカしている二人に向かって言う。ジーナとアリサは渋々降りると、ロイに寄って行く。アレンは、仕方無く追いかける。
ここは、鉄塔の森と言われているところだ。発電所が廃墟になって水が溜まり、毒物が漏れ出したりしていて色々なところにアラガミの餌場がある。ここでは数々の鉄塔があるのが名前の由来だ。

「作戦を説明するから、良く聞いとけ」

ロイは続ける。

「今回はクアドリガ堕天種がターゲットだ。
アリサ、アレン、ジーナは炎の弾丸やレーザーで集中攻撃、弾切れになったら教えてくれ。俺が合図を送るから。
合図を送り次第、敵に突っ込み捕食してアラガミバレットを俺に渡してくれ。大丈夫、スタングレネード投げるから。
その間に俺はチャージクラッシュを構えるから、それでチェックメイトだ。
以上、なにか質問は無い？」

チャージクラッシュとは、いわば溜め切りの事で力を刀身がバスターと呼ばれる巨剣に込めて相手に振り下ろす。その時に黒いオーラが出て攻撃範囲が広くなるし、バーストモード…リンクバーストでパワーアップしているか、捕食して身体能力を向上させている状態の事を指し、バーストモードで行ったらチャージ速度と攻撃の強さ

が増す。

堕天種とは、アラガミの基本の種類が周りに適応して形は一緒だが、耐性や、攻撃の属性に変化が起きた亜種の様な存在で、堕天種がいないのは現在、ヴァジュラしか見つかっていない。ヴァジュラは、その種が完成体なので、強靭な身体で場所の環境に関係無く対応できる。

ロイは皆に問いかける。誰の返事も無いので、

「無いな。よし、索敵を開始する」

ロイ達は、クアドリガ堕天種を探し始めた。

そして…

「いたぞ、見つけた」

「あれね…」

ロイはジーナと一緒に索敵していて、見つけた。クアドリガ堕天種だ。青っぽいボディにキャタピラーみたいな足、背中にミサイルボットが2つ付いていて、そこから大量に爆弾をばら撒く事ができる。更に前方の装甲からはトマホークミサイルが発射できる。うぜえ、ホント。

「とりあえず、みんな呼ぶか」

信号弾を空に向かってうつ。時期にみんな集まるだろう。クアドリガ堕天種は、餌場を動かない。しばらくして、

「ロイ、きたゼ～」

「遅くなりました」

アリサとアレンがきた。

「よし、作戦どおりにいくぞ」

ロイは、走り出す。そして、後ろを向いているクアドリガ堕天種のミサイルボットの一つを

切り落とした。

クアドリガ堕天種から大量の血液が流れ出る。その勢いでもう片方のミサイルボットをも奪った。クアドリガ堕天種は突然の奇襲に驚くが、すぐにこの世のものとは思えないような悲鳴が静かだった工場地帯に響き渡る。まるで、断末魔のようだ。

「グオオオオオン！！！」

「どうした、早く撃て！」

ロイの声で皆、我にかえる。当然だ、ミサイルボットなんて切り落とせるものじゃない。皆唖然としていた。奇襲をかける、とは言っ

てたがこれ程までとは…

「はハ…勝てる気がしねェ～」

「やっぱり、凄いわね」

「わたしたち、必要ないんじゃないですか…」

三人は、思い思いの言葉を言うと、すぐにクアドリガ堕天種に狙いを定めて撃ち続ける。アリサとアレンは装甲を狙う。立派な外殻が剥げ、青みがかかったものが赤に染まる。
ジーナは弱点だったミサイルボットのあった部分を器用に狙い、撃ち抜く。素晴らしく、そして見入ってしまうほど綺麗だ。

クアドリガ堕天種は、攻撃をしようとしてミサイルボットを開こうとするが、それが無い事に気がつく。
クアドリガ堕天種に弾丸の雨が降り注ぎ、それが終わる頃には身体中ボロボロになっていた。目も当てられない。

「弾切れです！」

アリサがそう言うとロイは一旦離れて合図をし、スタングレネードをクアドリガ堕天種に向けて投げつける。当たると同時に炸裂音と強烈な眩い光が辺りを一瞬てらす。
成功だ。クアドリガ堕天種は、フラついている。

アリサとアレンは、神機を刀身に変えてプレデターフォームにすると、喰らい付いた。硬かった装甲は、いとも簡単に喰い千切られ、捕食者の糧となる。

アリサとアレンは、チャージクラッシュを構えているロイに向かってアラガミバレットを受け渡す。
ロイの刀身が、闇のように黒いオーラを纏う。禍々しい力を宿す、大鋸に。
ロイは、振り落とす。目の前の敵に。

クアドリガ堕天種は、動いた。ロイに向かって飛びかかる。最後の、そして最初の攻撃を繰り出すが、それが届く前に真っ二つになってしまった。

「よし、コアを取り外した。終わり～、疲れた～」

そして疲れて無さそうに大声で笑うロイ。
そしてクアドリガ堕天種が可哀想になってきたアリサ。
そしてロイと一緒になって笑っているアレン。
ジーナは、楽しめなかったと呟く。

それぞれは、どんよりと曇った空の下、帰りのヘリを待っていた。

vol. 11（後書き）

遅れてすんません。
頭痛でかけませんでした。
みんなも風邪には気をつけよう！

vol.12（前書き）

とりあえず、更新。

vol. 12

「今、コアを届けてきました」

「ご苦労だったね」

「では、これで」

この三文で、支部長との会話は終わった。
よっしゃあー！ラッキー！…とロイは思っている。

「何かいいことでもあったのかね？」

「い、いえ、何でもありません」

心の声が聞こえるのか、あの男は…　ロイはそそくさと出て行った。

途中でジーナと食事にいく約束を思い出したので、ジーナが既に予約しているという店へと向かった。

「お待たせ～、ジーナ」

「わたしも今来たところ」

ジーナは、いつもの服装で来ていた。相変わらず、胸元が露出していて目のやりどころに困る。とりあえず席に座ると、注文をする。

ロイはパスタで、ジーナも同じものをたのもうとするが、

「違う種類がいいんじゃないか？俺のを分けてやるからさ。そうした方がお得だと思うぜ」

ロイのアドバイスを聞き、ジーナはカルボナーラを注文する。水でも飲もう。そう思ってロイはポットに手を伸ばすと…

視線の先に、見なれた影がささっと２つ隠れて行った。あれは、アリサと…誰？　　影はロイたちに隠れるように席に座っている。カウンターでは無くテーブルに座っているロイや、特に完全に背後に座っているジーナは気づきにくい。害は無さそうなので放っておく。

二人で水を飲みながら話をしてると、料理がきた。ロイはジーナにフォークをとってあげると、アリガト、とほほえんでジーナは返事をすると、後ろの席では…物が割れる音がする。ジーナ、気づいてるな…　　パスタを頬張りながらロイは苦笑いする。

「はい、ジーナこれ」

ジーナに皿を差し出すが…

「貴方がわたしの口に入れて」

ジーナはもの凄い発言をする。　　…後ろの席では、暴れるアリサと、それをなだめるサクヤ＆ａｍｐ；店員さんがいた。

サクヤさんだったのか。

「ねえ、早くしてくれる？」

ああ…こっちの方も問題が、

「わたしにも食べさせてください！」

アリサまで入ってくんな！あとサクヤさんは笑ってないで助けて～。

ロイの悲痛な心の声は誰にも届かなかった…が、しかし！

「ん？」

ソーマだ！ソーマがいる！助けて～お願いします！…とアイコンタクトをとるが…　無視された…ソーマはそっぽを向いている。　あいつ、後で私刑に処してやる。ロイはそう固く決心した。

「「話、聞いてる（ますか）！！」」

知らねえってえの！

「貴方は優柔不断なのよ」

「ロイはこんなぺったんこが好きなんですか？どんびきです！」

「ジーナ…別に決断を迫られてる訳じゃあねえし。アリサ…お前は大声でそんな事言うのやめろ。どんびきです、じゃねえだろ」

ロイはそう告げると二人は静かになった。と言っても、アリサが静かになっただけでジーナは変わらない。ジーナは水を一口飲み、質問を再開した。

「ねえ、ロイって好きな人いるの？」

アリサの顔が真っ赤になった。

「ああ、いたよ」

即答した。ジーナも戸惑っている。意味が分かったみたいだ。アリサは変わらず顔を真っ赤にしてる。

「それじゃあ、俺帰るね。楽しかったよ」

そして、ロイは席を立った。ジーナも席を立ち、金を払おうとするが、ロイは二人分払う。

「今日は俺のおごりだ」

じゃあね、と短く別れを告げるとロイは自分の部屋に帰って行った。ジーナも自分の部屋へと帰る。アリサとサクヤは壊した物の後片付けをしている。

帰りに買ったコーラを片手に部屋へと入る。ロイは、コーラを飲み干すと缶を捨ててそのままベッドに倒れこんだ。明日は、何をしようかな。考えているうち、ロイは眠りについてしまった。

ｖｏｌ．１２（後書き）

ロイはソーマに後でシカトした理由を聞いたら、

ソーマ「お前、今日はオレと飯喰うんじゃなかったのか？」

ああ…忘れてた。

vol. 13（前書き）

受験勉強しなきゃいけないので、当分はこのペースで。
すいません。

vol. 13

ここは、夢の中です。

黒い髪を持つ少年、ロイは訓練に明け暮れていました。毎日、毎日、体を鍛え、戦術を学び、頑張っていました。

ロイに家族ができました。２０代後半の男です。名を、デートルートといいます。職業はゴッドイーターをしていて、本部に所属していました。

ロイが、孤児院の跡地でたたずんでいたところに、当時は隊長であったデートルートが分析などをするため、来た時に出会いました。

デートルートは、ロイが唯一の生き残りであることを知ると、家族になれ、と言ってきてくれました。

ロイは、行く宛がなかったのでついて行くことにしました。　行き先は、昔、アメリカと呼ばれていたところでした。

最初は、心を閉じていて暴れていたり、悪口を言ったりしてましたが半年が過ぎる頃には、仲が良くなっていました。　暗い気持ちは無くなって、元のロイに近づいていきました。

血の繋がりはないけど、本当の家族のように過ごして来ました。

ロイは、とても嬉しく思っていました。家族はこういうものなんだと、始めて理解ができました。繋がりができる幸せをロイはいつまでも感じていたいと思いました。

しかし、

悲劇は、

まだ続きました。

ロイは、いつものように家でデートルートの帰りを待っていました。ですが、帰ってきたのは二通の手紙でした。手紙には

デートルート・マテルガンド　　作戦中にＫＩＡ

最終階級　　少佐　　とだけ書かれていました。ＫＩＡとは戦死という意味です。　ロイは、泣きませんでした。絶対に泣きませんでした。

もう一通の手紙には、自分宛に書かれた手紙でした。ゴッドイーターにならないかという、お誘いの手紙でした。極東と呼ばれるところの支部からきていて、自分のいた孤児院があったところです。

ロイは、行くことを決心しました。家は、そのままにしておきまし

た。　迎えは、本部にくる予定なのでデートルートの知り合い本部まで送って貰いました。
その時のロイの眼は、復讐の？に燃えていました。

ロイは、ふと目を覚ました。辺りを見渡すと、自分が夢を見ていたことを思い出す。悪い夢では無かったな…ロイは感想を呟く。

「はあ、仕事するか」

ロイは立ち上がると、本棚に目をやった。写真たてが倒れている。そっと、ロイは立ち上げると、懐かしい顔がうつっていた。

「父さんの教え、まだ破ってねえからな」

ロイとデートルートが肩を組んで笑ってうつっている写真を見て微笑んだ。今日も頑張ってみますかね、そう思いながらロイはエントランスへと向かった。

「ヴァジュラ？」

「そうなんダ、街にいるっテ～」

ロイの質問にアレンは呑気に答える。どうやらソーマやサクヤ、コウタも行くようだ。

「お前はどこに行くんだ？」

ソーマはロイに質問する。

「アリサとリンドウさんと一緒に偵察」

ロイは素っ気無い返事をする。

「そうか、じゃあまたな」

ソーマも返事を返す。

「そろそろ行こうかしら」

サクヤの一言で、皆が動きました。出撃ゲートへと一直線！

「アリサとリンドウさんがきたら、こっちも行こうかな」

もっとも、早くくるとは思ってないけど。ロイはそう心の中で毒づいた。

vol.13（後書き）

眠い…

ｖｏｌ．１４（前書き）

毎回、不定期更新ですいません…

vol. 14

「予想どおりだったな」

ロイは、遅れて来たアリサとリンドウに言う。アリサは、ロイと目を合わせると顔を赤くしてしまった。リンドウはいつもどおりだ。

「市街地の探索だろ、急がなくてもいいんじゃねえか？」

「時間は、人が作った絶対のルール、それを破る人が何を言ってるの。それに、無限にある訳じゃない。なら、急いで終わらせたほうがいいだろ」

ロイはもっともらしい言葉を並べると、出撃ゲートへと向かったのであった。アリサは急いでついていき、リンドウは万屋で回復錠などを買った。

「遅れた理由は何ですか？準備に時間がかかったんじゃなかったんですかね」

「寝坊」

「うん、ついたね」

ロイは、ヘリから降りると神機を構える。続いてアリサが降りてきて、リンドウも降りる。リンドウの顔には湿布が貼られていて、痛そうにさすっている。

「さて、出発しよう」

「そうですね」

ロイの言葉にアリサは相槌をうつ。リンドウは無言を貫きとおしてしまっている。

「リンドウさん、何か喋ってください」

「そうですよ！　リンドウさんらしくありません！」

ロイは嫌味みたいに言うのに対して、アリサは本気で言っている。非常にタチが悪い。

「お前がいきなり殴るからだろ！」

「リンドウさんが寝坊したのが悪いんでしょう」

「そうですよ！　寝坊したリンドウさんが悪いんです！」

反論するリンドウに、容赦なく正論？を言うロイと、それを擁護するアリサ、リンドウの敗北は目に見えている。黙ってしまったので、ロイは歩き出した。アリサもそれに続く。リンドウは殿を勤めてい

るので、自然に後を追う形になる。

「くれぐれも周囲には、気をつけてくれ。特に、リンドウさんは」

「俺、殿を辞めてもいいか？」

「いえ、ベテランのリンドウさんがやるべきです」

「静かにしてください！　探索中に喋って、ホントに自覚がたりませんね！貴方達は！」

アリサは、自分が一番うるさいことに気がついてないようだ。

「アリサ、うるさいぞ」

ロイは、人差し指を立てると口の近くにもっていき、シィーっというポーズをする。リンドウは周囲をしきりに見渡して、敵が来ていないか確認しているようだ。　アリサは、彼に言われてすぐに静かになる。

「さあ、進もう」

市街地の中心に向かって、ロイ達は進む

「そりゃァ！」

レイピアの様な刀身が、アラガミ…ヴァジュラの前脚に突き刺さると、白い刃が肉をえぐる。ヴァジュラは雷球を繰り出すが、アレンは物陰に隠れてしまっているため、当たらない。

後ろからはソーマの巨剣がヴァジュラの身体を削り、前後からはサクヤとコウタのレーザーと弾丸が、マントに風穴を開け、同体にダメージを与える。

ヴァジュラは、ソーマに跳びかかるが装甲でガードされてしまう。周りには電撃がほとばしるが、全てを拒絶する彼の装甲にとっては、関係ない。

「オラアアアァ！」

ソーマは、ヴァジュラにカウンターをくらわせる。鋸が、顔面に深い傷を負わせる。ヴァジュラは負けじと前脚を振り回すが、ソーマは後ろに下がり、これを回避した。

雷を纏う爪が、顔すれすれに通りかかる。

後ろからは発砲音が絶えないが、まだ倒れない。ヴァジュラは、コウタにのしかかってくるが、近距離での被弾に怯んでしまう。

「流石にきついな…」

「あア～、まだなのかナ～！」

コウタが泣き言を言っている一方、アレンは前脚に刀身を突き刺そうと前に出るが、ヴァジュラの雷球に当たってしまう。

「おい！　大丈夫か！」

ソーマが助けにくる。アレンは手をかして貰うとお礼を言う。

「サンキュー、ソーマ！助かったゼ～」

アレンは回復錠を口にふくむと、飲み込んだ、痛みと痺れが消える。ソーマはヴァジュラに向かって走り出す。

　アレンは銃身に神機を変えると、ヴァジュラを狙い撃つ。顔が炎の弾丸によって爆ぜると、ヴァジュラの悲鳴が聞こえる、片目が潰れたようだ。ヴァジュラは全身を地に伏せる、スタン状態だ。

「一気に崩すぞ！」

ソーマの掛け声と共に、一斉に弾丸とレーザーが降り注ぐ。ソーマは全身に力を入れると、チャージクラッシュを構える。　黒い刃が禍々しいオーラを放っており、見るものに恐怖を抱かせる。

「くたばれ、化物！」

それを、ヴァジュラに振りかざすと、ヴァジュラからは致死量とも思える多量の血液が飛び散る。ヴァジュラは、動かなくなった。ソーマはコアを回収するため、神機で捕食する。
コアは、こうして取り出されていて、後で神機から摘出する。

「よし、終わったな」

「はあ～、やっと帰れる…」

「本当に疲れたネ～」

「帰ったら何しようかしら」

各々の今回の感想を言い、さっさと帰ろうとするが…

「あれ？　お前ら何でここに？」

皆がふりかえると、ロイ達がこっちに向かってきていた。

vol.14（後書き）

はい、そうです。蒼穹の月です。オリジナルになるかと…
あっ、もうなってますね…

vol. 15（前書き）

長いですけど、すいません！

vol. 15

「おい、どうしてここに？」

ロイは、アレン達に尋ねる。しかし、アレン達も答えられる訳がなくて、

「さア？　何でだろうネ～？」

「どうして同一区画に2つのチームが…」

「あれ、リンドウさん達。何でここに？」

コウタのバカは、逆に質問してきた。ロイは、コウタの頭の残念さに思わず溜め息をつく。

「ねえ、今失礼な事考え無かった？」

「コウタ、お前は友達の俺を疑うのか？」

コウタは、黙ってしまう。その時、リンドウが口を開いた。

「考えるのは後にしよう。おれたちは中を確認、お前達はここで待機。いいな」

リンドウは、教会だったところに入って行く。ロイとアリサはそれに続く。　　アレン達は、一方通行の教会の入り口付近で警戒を続けている。

教会の中は、静かだった。風の吹く音がハッキリと聞こえ、静寂が街の廃墟を覆っていた。
しかし、

「ガアアアァァ」

それはひとつの来訪者によって、崩された。

白い、女神の石像の様な顔をしたヴァジュラが、ステンドグラスの窓があったはずのところから、いきなり降りてきた。蒼いマントが、ひらりとゆれる。

「下がれ！　アリサ、後方支援を頼む！　ロイは待機してるあいつらのところに行ってくれ！」

ロイは、リンドウとアリサにその場を任せると、急いでアレン達のところに向かった。　リンドウは、白い顔のヴァジュラと戦闘を繰り広げているが…

「アリサ、どうした？」

ロイはアリサに声をかけるが、返事が返ってこない。　様子がおかしい、ロイは内心そう思いながらも、この場を後にした。

「パパ、ママ、やめて、食べないで…」

ロイは、アレン達のところにつくと、周りを見て、驚愕した。あの白い顔のヴァジュラが、いっぱいいたからだ。

「まずいな、こっちも囲まれてやがる！」

ソーマは悪態をつく。　サクヤはリンドウの事が心配で、しきりに教会の中を気にしていた。その中の一匹の白い顔のヴァジュラが、近くにいたコウタに跳びかかる。コウタは、当たってしまったが後ろに下がったことで、衝撃を緩和した様で、すぐさま立ち上がり武器を構える。

緊迫した空間の中、ロイは、リンドウの声を聞いた。

「アリサ！　どうした！」

やっぱり、マズかったか。ロイは急いでリンドウの所に戻って行った。

またアリサとすれ違うが、やはり、何か変だな、ロイはリンドウに加勢する。

ロイは、大剣を振るう。巨大な鋸が、白い顔を鮮血で滲ませ、ずたずたに引き裂く。と、同時にリンドウが追い討ちをかけるが、白い顔のヴァジュラは、リンドウに大きな前脚を振りかざす。

予期せぬ攻撃にリンドウは飛ばされて、スタン状態になってしまう。ロイは、牽制として大鋸を一文字に振る。白い顔のヴァジュラは、

一歩下がり、こちらの様子を見ている。

勝てる！とロイは確信するが、予想外の事が起こった。白い顔のヴァジュラが、アリサに突進しようと走っていた。しかし、何故かアリサは動かない。ロイは、アリサにタックルをして強制的に回避させる。だが、その代償にロイが突進を受けてしまった。

「ロイ！　大丈夫か！」

「平気です、まだいける！」

リンドウが、白い顔のヴァジュラに切り掛かっていて、注意がリンドウにいった。それを期に、ロイはアリサをアレン達の所に連れて行こうとするが、

「один・два・три…」

アリサは、ロシア語で何か唱えている。アジン、ドゥヴァ、トゥリー？何を言ってる？いや、数えてるのか？ロイは、アリサが何を言ってるのか分からない。

すると、いきなり銃口を敵…いや、リンドウに向けた。

「アリサ！　何してる！」

ロイは、アリサを止めようと、手を伸ばすが…、

「いやあああぁ、止めてえええええぇ！」

アリサは引き金を引いてしまった。

悲劇の弾丸は、
白い顔のヴァジュラにも、
リンドウにも向かわず、
天井に当たって、落ちてきた瓦礫が、唯一の通路を閉ざしてしまう。
「貴方、一体何を…」
駆けつけたサクヤがアリサに尋ねるが、
「違う、違うの…　パパ、ママ…　やめて、食べないで…　わたし…そんな、つもりじゃ…」
まるで、何かにとり憑かれたかのように、その言葉を繰り返す。サクヤは、瓦礫を動かそうと、瓦礫に向かってレーザーを放つが、動くことは無かった。瓦礫の向こうからは、何か大きなものが倒れる音がした。

とりあえず、ロイは今の状況を見つめ直す。アリサが実質戦闘不能、リンドウは閉じ込められ、周りには新種のヴァジュラ……絶望的だ。その中で、リンドウを助け出せるか？いや、助けることはできない。絶対的なリーダーを失ったロイ達は、頭をなくしたトカゲの様に、混乱していた。指揮官を失うと、これほどまでに不安なのか…　途方にくれているロイ達に、瓦礫の向こうからリンドウの声が聞こえた。

「命令だ！　お前ら！　アリサを連れて逃げろ！」
「おい、どういうことだ！」
「でも…」
ロイとサクヤは、向こう側にいるリンドウに問いかける。
「聞こえないのか！　アリサを連れてとっとと帰れ！」
「サクヤ、全員を統率。　ソーマ、退路を開け！　ロイには殿をしてもらう！」
「リンドウも、早く！」
「わりいが、おれはちょっとこいつらの相手してから帰るわ。配給のビール、取っといてくれよ。」
「ダメよ！　わたしも残って戦うわ！」
リンドウの命令に、全く聞く耳を持たないサクヤ。
「サクヤ…、これは命令だ。全員、必ず生きて帰れ！」
「いやよ、リンドウぅ！」
「サクヤさん、行こう！このままじゃ全員共倒れだよ！」
コウタ！この空気を壊すんじゃねえ！　ロイは心の中で叫ぶ。

「イヤアアアアァ」

コウタは、サクヤを連れて行った。ロイはアリサを抱えてその場を離れる。　ソーマとコウタは、新種のヴァジュラを牽制している。ロイは、言われた通り殿を務めていた。

少し距離をとったところで、ロイはソーマを呼び、何かをささやく。ソーマは驚愕の表情を浮かべるが、すぐに、

「分かった、絶対に死ぬなよ」

そう、一言。ロイは離れる仲間を尻目に、あの教会へ向かった。

「行ったか……」

リンドウは、閉ざされた教会の中で一人、つぶやく。手には火のついたタバコを持っており、絶えず煙を出している。

「あいつらなら、大丈夫か…」

「はい、大丈夫です。もう安全ラインに入っているでしょう」

瓦礫の向こうから、若々しく、少し大人びた少年の声が聞こえた。

リンドウは、バッとふりかえる。

「外には、いないのか？」

いない、というのはおそらく、白い顔のヴァジュラの事だろう。

「はい、正確には今はいないってことです」

「一人でやったのか！」

ソーマの声から推測して、すごい数だっただろうと思っていたが……逃げ切れたのも当たり前か。リンドウは、自分の嬉しい誤算に笑みを浮かべるが、

「ええ、数十匹は下らないでしょうか。報酬が楽しみです」

あれを、一人で……、

「とりあえず助けるので、瓦礫から離れて下らない。あ、別に離れなくていいんですけど、木っ端微塵になります」

さらっと怖いことを言うロイに、リンドウの顔から血の気が消える。すぐさまに瓦礫から離れて、装甲を構える。

「じゃあ、まず二トログリセリンを瓦礫に大量に入れて…」

最近の若いのは二トログリセリンを持ち歩くのか…、リンドウは、タバコの火が消えたのを確認する。自分の世代との違いに思わず身震いした。

「そして、あの新種のヴァジュラのアラガミバレットを一気に放出して、吹き飛ばします」

リンドウは、教会の一番端の一角に装甲でシェルターを築いた。すごい早さだ。

「いきます！」

次の瞬間、想像を絶する爆発と、冷たい氷柱が、互いに打ち消しあい、その反作用で瓦礫を吹き飛ばした。

衝撃波が、ロイを襲う。銃形態の時には装甲を展開出来ないのだ。

壁に叩きつけられ、吐血する。更には、瓦礫の破片がロイに突き刺さるが、彼は屈しない。

立ち上がり、回復錠を飲むと、傷は回復する。が、衝撃波による内側のダメージは、すぐには消えない。走るのがやっとだ。

「随分と、元気じゃねえか。若いのはこうでないとな」

リンドウは、瓦礫の他に自分の倒した敵の死体が、壁に張り付いている様子と、ロイの様子を見比べると、クラっと目眩が……、あれでも、倒れないの？と、質問したいが、口がパクパクして言葉が出ない。

神機を置き、深呼吸…。やっと落ち着くと、

「何でここに来た！　おれの命令が聞こえなかったのか！」

「聞こえた、だからさ」

「じゃあ！何で…」

「あんたは！　俺たちに、全員で生きて帰れって言った！」

「……」

「あんたは、死ぬつもりじゃなかったのか？」

「……」

「答えてみろ！雨宮少尉！」

そう、激しく問い詰める少年の眼には、？が、宿っていた。何時もののほほんとした目ではなく、一人の、歴戦の戦士の眼のような、鋭いものだった。

リンドウは、言葉が出なかった。

「リンドウさんは、あの中に入っていたのか？　命令した、全員という俺たち、第一部隊の中に！

もう、あんた一人の命じゃないのは、一番良く知っている筈だ！全員の命だ！　見捨てる事なんて出来るか！

無責任な事を言うなよ、あんたの言葉に嘘なんかいらない！　あんたの言葉に救われた連中にどういう顔をするんだよ？」

「……ああ、わりい」

気迫に、押された。強い感情が、一つひとつの言葉にこもっていた。

リンドウは素直に謝ると、

「でも、上官に対して暴言を吐くなんてな。正直、ビックリしたぜ」

「俺も、たまにはそんな気分になります」

「ストレスは、溜めねえよぉにな」

「でも、今日で発散させましたよ」

ああ、あの新種の事か…

「さあ、みんなが待って…」

そう、言いかけたところで、もう一つの絶望が降臨した。

vol.15（後書き）

はい、長いっす。
すいません！どうしても書きたかったので。
次は、あいつがやってきます。

vol.16（前書き）

すいません、更新遅れました！
理由は、のちほど…

vol. 16

「お、お、お前ぇ！　何でここに！」

降り立った黒いヴァジュラを見たロイの顔から、余裕と冷静さが瞬時に消え失せた。

ロイが、動揺している。初めて見るロイに、リンドウは内心、焦る。これ程の少年が、こんなにも震えているからだ。

「お前は、アメリカにいたんじゃなかったのか……、父さんの仇が、何でここにいるんだ！」

返事が返ってくる筈もない相手に、必死になって問いかけるロイ。それを聞いて、リンドウはハッとした。あの日、本部から来たあの男を思い出す。まさか、養子をとっていたとは…、

「ロイ、どういう経緯があったかは知らねえが、逃げるのが最優先だ！」

リンドウは、ロイを止めようとするが…

「許さねえ！　お前とあいつだけは、何がなんでも殺してやるって決めたんだ！」

既に、走り出していた。

ロイは、得物の大鋸で顔を潰そうと振り回す。

黒いヴァジュラは、前脚で巨剣を受け止めると払いのけ、電撃を帯びた巨大な漆黒の身体でタックルを仕掛ける。
しかし、ロイは素早い身のこなしでバックステップ。後ろ足に力を込め、重心を前に。そして、風のような速さで黒いヴァジュラに再び突っこんで行く。

「絶対に、勝つんだ！」

ロイは、また顔を狙う。

振るわれる巨剣が、空間を切り裂き、大気を震わせ、相手を喰らわんと獲物へ襲い掛かる。

「ゴオオオ？」

その凶悪な刃は、黒いヴァジュラの顔を捉え、片目を潰した。黒いヴァジュラからは苦痛の声が聞け、引き裂かれた目からは多量の、赫い体液が滝のように流れ出す。

更に、敵の血が、ロイの狂気を加速させる。

「もっとだ！　もっと苦しめぇ！　アラガミがぁ！」

狂気の剣は、まるでロイと踊り狂うかのように、黒いヴァジュラのマントを切り落とし、爪を砕く。

「グオオオオ！」

しかし、敵も黙っていない。腕を振るい、雷撃をはなつ。　ロイは、全て装甲で受け止めるが、鈍い衝撃が、腕を襲う。

…、強く、なったな……

「…！！」

誰だ、今のは。

…、やはり、特別な存在だからな……

「まさか…、そんなはずは…！」

ロイは、遠いむかしのような思い出に消えたはずのものを、自分の初めての父親のことを、そして、師匠だったあの男を思い出す。

必死になって周りを見渡し、失ったものを探す。

……ああ、大きくなってなあ……

「何故だ！　何故俺の前に現れないんだ、父さん！」

……いるじゃないか、ここに……

「えっ？　どういう…」

声が聴こえた先には、黒いヴァジュラしかおらず、他には何もない。

……ここだよ、ここ……

「グオオオオ！」

黒いヴァジュラが、遠吠えをあげる。　ロイは、何がなんだか分からないっていう顔をしていたが、

「ロイ！　油断してんじゃねえ！」

ロイはリンドウの声にハッとして、再度敵を睨みつけるが、黒いヴァジュラは、こちらの様子をうかがっているだけだ。

おかしい、いままで反撃のチャンスがあったのに、攻撃をしてこない。何故だ？黒いヴァジュラは、まるで何かに邪魔されているかのようだ。

まさか…

「父さんは、黒いヴァジュラに神機ごと捕食されたと、同僚も言ってた。更に、一緒にミッションに行った仲間からも裏付けが取れた。

今、俺に話しかけているのは、誰だ？」

……ああ、おいらは死んだ。今はこいつの中さ……

「いったい、どうやってそうなったのか、分からないの？」

ロイは、デートルートに尋ねる。

……分かんねえ、でも、もうすぐ消えることはわかる……

「なんでだ！　なんで分かるんだよ！」

……お前から斬られるからさ。お前は強くなった、早く、解放してくれ。おいらがこいつを止めておくからさ……

「俺には、出来ない…」

……お前なら、出来るさ。おいらの息子じゃんかよ。早くしてくれ、長くは持たねえ……

「デートルートさん、お久しぶりっす。リンドウです」

……リンドウ？　ああ、あの時のガキかい、大きくなったねえ。息子がお世話になったって？　すまねえなあ。ヨハネスには、取られたくなかったけどね。それより、よく生きていたな。極東は激戦区だって聞いたが？　まあいい、セガレがダメだった時にはお前においらを任せるぜい……

「はい、わかりました」

饒舌だな…そう思いながら返事を返す。そして、手にある自分のチェーンソーを握り締める。

「俺には、出来ない…」

「ロイ、早くしねえと仇が逃げるぞ！　いいのか！」

リンドウが、弱音を吐くロイを奮い立たせるが、反応がない。

……クソッ、もう持たん！　おいらは、もう消えるからさ、お前らは、早く逃げろ……

「グオオオオ！」

途端に、拘束がとけたかのように、黒いヴァジュラが雄叫びをあげる。

「ロイ！　撤退だ、逃げるぞ！」

リンドウは、ロイの手を引いて走り出す。空いた方の手でスタングレネードをポーチから取り出すと、ピンを抜いて黒いヴァジュラに投げつける。

静かな教会に響く、一つの破裂音。

それは、確実に黒いヴァジュラの感覚器官を刺激し、一時的に使えなくする。黒いヴァジュラは、のけぞっていた。　その隙に、教会から脱出した。

走った、とても走った。一生懸命、生きのこるために走った。

気がつくと、黒いヴァジュラはいなくなっていた。うまく、逃げ切れたみたいだ。　空が夕焼けで橙に彩られ、千切れ雲が赤みを帯びている。

「とりあえず、連絡をしてみるか」

リンドウは、持っていた携帯端末を使い、迎えを呼ぶ。　この携帯端末は、部隊長は必ず携帯することを義務ずけられていて、リンドウも例外ではない。

「もう少しでつくそうだ。休憩でもして、気長に待とうぜ」

リンドウは、ロイに話しかける。

「はい、そうします。何か、色々な事が起こり過ぎて分かんないです」

「ああ、帰ったら支部長に色々聴かねえとな」

うんざりしたように、吐き捨てるリンドウと、それをみて苦笑いするロイ。リンドウは、タバコを吸い始め、　ロイは座り込むと、壁を背もたれにして眠ってしまった。

数十分くらいして、迎えが来た。リンドウは、寝てるロイを背負い、ヘリに向かい歩いていく。

その様子を、夕日を後ろに黄昏るように見つめた、一人の少女が黒いヴァジュラの黄色いマントをかじるようにして喰べていた。

vol.16（後書き）

いやー、テスト期間で書く暇が無かったんですよ。
ほんとにすいません！

vol.17（前書き）

はい、遅くなりました。すいません！

vol. 17

ここは、夢の中です。
もう、くどいという方もいるかと思いますが、残念ながら、まだ続きます。

ロイは、閉ざされた教会にいます。
横には、リンドウ、目の前には、黒いヴァジュラ。 空間は、まるで二人を閉じ込めているかのように、闇の中で存在していた。
突然、黒いヴァジュラが喋り出しました。

「オマエは、人間か？」

初老の男のような声が、黒いヴァジュラから発せられる。

「ああ、人間だ。それがなにか？」

ロイは、平然と答えると黒いヴァジュラに質問しました。

「オレの中には、人間が一人いる。かつて対峙した、勇敢な戦士だ」

おそらく、デートルートの事だろう。

「それが、どうした」

「オマエ、そいつの何だ？」

黒いヴァジュラの声が、閉ざされた教会に響き渡り、反響する。

「息子だ」

短く、そう答えると、自身の剣をかたく握り締める。　それにしても、リンドウが全く喋らない。

「違うな、オマエとオレの中の勇敢なる戦士は、血が繋がっていない。　もう一度、聞こう。　オマエは、何だ？」

なんで、知ってるんだ？

「俺は…」

答えようとしたロイの頭に、数々の声が響く。

「オマエは化け物だ！」
「オマエが、あの子を殺した！」
「オマエは、人じゃないのさ！」
「オマエは、義理の父親でもあったデートルートをも殺した！」
「オマエは、オマエではない！」
「オマエは誰一人とて信用出来ない！」
「あの子も、義理の父親も！」
「オマエは、決して許されないんですよ！」
「オマエが言いたくないのであれば、皆で言ってあげるよ！」

やめろ…、やめてくれ……!!

「「「「「「「「「オマエは!」」」」」」」」」

やめろおおおおおおおおおおおお!!

「「「「「「「「「「アラガミだ！」」」」」」」」」」

ロイは、そこで目が覚めた。
あたりは、眠っていた夕焼けで彩られたコンクリートの街ではなくて、白一色に統一された病室だった。　ロイは、身体を起こすと二人分の人影が目に映る。

「あっ、起きたんですね！」

「気がついたのね…」

目の前にいたのは、髪が桃色で小柄な少女と、紫の髪をもつ隻眼の女だけだ。

隻眼の女はジーナだが、桃色の髪の少女は…そう、誤射姫だ。　ロイは三度ほど一緒にミッションに行ったが、腕前は確からしい。
…が、仕事場で敵の他に警戒しなければならないのは、間違いなく彼女だ。

「あ、お菓子作ってきたんですよ！　良かったら、食べて下さいね」
誤射姫…カノンは、ポーチから袋を取り出すと、ロイに渡す。どうやら、クッキーのようだ。
「美味しくなかったら、ごめんなさい！」
ああ、そのままだったら可愛いのに。ロイはクッキーを貰うと、ありがとう、と一言言うとベッドから起き上がろうとする。しかし…
「いてっ！」
突然、腕に激痛が走り、ロイは顔をしかめる。腕に目をやると、包帯が巻いてある。しかし、ここにいる訳にはいかない。
「ダメよ、安静にしてないと」
「そうですよ。　すごい怪我だったんですから。三日はベッドから出ちゃダメですからね！」
ジーナとカノンがロイを止めようとするが、ロイはそんなことには耳を傾けず、痛む腕を抑えながら自室へと戻っていった。
「行っちゃったわね…」
「アリサちゃんのことも、伝えそこねましたね…」
二人は、ロイの隣のベッドに眠っているアリサを見た。　ロイは、気付かずに行ってしまった。
今は大人しいが、起きてる時はすごかった。大声で叫んだり、暴

れたりと、とてもじゃないが普通の状態だと言えなかった。
そこで、ロイの力を借りてアリサを元に戻そうと考えたが、当時者が消えてしまったのだ。

「どうしよう……」

カノンは、はあー、と溜め息をつく。

「彼は、またここに来ると思うわ。彼なりに情報を集めて、きっとここに来る」

ジーナは、そう言って病室から出て行った。カノンも後に続く。

自室でロイは、ベッドに座り薬を飲んでいた。　もちろん、回復錠だが今回のはパワーアップバージョンの回復錠改だ。　効果は言うまでもなくて、4~5個ほど飲むと、痛みが引いた。

「リンドウさんの所に行こうかな」

ふらっと立ち上がると、リンドウの部屋に向かい、歩いた。

ロイは、コンコン、とノックをしてリンドウの部屋の前に立った。
入っていいぞー、と返事が返ってきたので、ロイは扉を開ける。まあ、自動式なんだが…

「失礼します。リンドウさ……」

ロイは、目の前に広がる光景に絶句した。
どうやら、夫婦の営みの真っ最中だったらしく、リンドウは服を着ているが、部屋にいたサクヤはタオル一枚という何とも破廉恥な姿だったのだ。

「し、失礼しました…」

「イヤイヤイヤ！　そういうのじゃないから！」

「そうよ、わたしはリンドウの部屋のシャワーを借りてただけよ！」

こいつら…、
リンドウは別にサクヤの格好を気にしてはいないし、サクヤは部屋が近いくせにシャワー借りてるし、できてるな。

クソ！　リア充爆発しろ！　などとロイは思いながらリンドウの部屋へと入っていった。

「話が、あります」

ロイは、一段落してリンドウの部屋のソファーに座って、リンドウに質問した。サクヤがお茶を淹れて、持ってきてくれたので、ロイは、どうも、と一言。

「あの時、何が起きたんですか？　同一区画に2チームがはいり、新種が、最低二種類見つかった。

アリサは錯乱し、第一部隊は全滅の可能性も考えられた。どう、思いますか？　隊長であるあなたの意見を聞きたい」

当然の質問だ。

誰もが、そう思っていたに違いない。あまりに不自然な現象が、偶然にも重なったとは考えづらい。ここは、リーダーの意見を聞くべきだとロイは思っていた。

「まあ、手違いが重なっただけじゃねえの？　気にするだけ無駄さ」

予想外でーす。

「じゃあ、新種が現れたこともですか！」

「ああ、そうだ。とにかく、あんまり深く考えんなよ。気が持たないぜ」

なんで…

「何も感じないんですか！　この一連の事を、気にするなと！」

「…ああ、そうだ」

「見損ないましたよ、リンドウさん。もういいです、帰ります」

部屋を出ようと、ロイはソファーから立ち上がる。しかし、それを呼び止めるように、リンドウが口を開いた。

「アリサの容体が、あんまり良くねえみたいだけど、会いにいったか？」

病室だったから、会ってるか。と言われてロイは、急いで外に出た。

「まさか、気づいてなかったのか？」

「そんなはずは、ないわ」

呆れるリンドウとサクヤ。

ロイは、病室へと足を進める。

vol. 17（後書き）

受験勉強って、大変なんだと改めて実感した一週間でした。おかげで執筆時間が大幅に減って行きました…

vol.18（前書き）

すいません！　かなーり遅れましたが、どうぞ。

vol. 18

「なんで、気付かなかったんだろう。話によると、隣だったって…」

絶対に嘘だろ…、と、事実を全力で否定しながら、ロイは今日起きた場所を目指す。途中で、なんか買っていったほうがいいか？　と、思いコーヒー（自分の）と紅茶を自販機で買う。安物だが、いいだろう。

そして遂に、病室へと辿り着いた！

そして、少年は目の前の現実に、打ちひしがれるのであった…。

鍵が閉まってる！？

衝撃の真実に、ロイは顔を曇らせる。　苦労しながら、ここまで来たのにな…。　怪我で全身が痛くてたまらず、目の前が霞み、足がふらつきながらも、罪悪感と焦燥感が俺を掻き立て、前へ、前へと進んできたのに……。

半分ほんとで、半分は嘘だけどね。どれが本当で、どれが嘘なのかは秘密だけど。

ロイは、取りあえず待つことにした。　ここにくるまでの血と汗と涙の結晶を無駄にしたくはないからだ。

数時間後、ある人物が部屋から出て行った。その人物は、廊下で寝ている少年に声をかけた。

「おい、君。大丈夫か？」

少年…ロイは揺すられて起こされる。

「んあ…あ、どうも…」

寝ぼけた様子で、起こした相手に挨拶？を交わす。　中年の様なタバコをくわえた人で、白衣を身に纏っている。ああ、さては医者だな。ロイは立ち上がると、名前をたずねてみる。

「オレは大車っていう、アリサの主治医だ」

おっ、こいつに聞いてみようかな。

「あの、アリサの病室はどこにあるんですかね？」

「病室はここだぞ」

大車は後ろの扉を指差す。あ、間違えた…。ロイは、無駄に数時間を廊下で過ごしたことに、気付いた。

「ありがとうございます」

ロイは、改めて病室へと入っていった。

病室の中は、無駄なものは一切なくて、必要最低限のものだけが揃っていた。こじんまりとしていて、ロイとしてはこういう雰囲気がすごく好きだ。
静かな空間の中で、カチコチと時計の針が音をたてて時を刻む。
その中で、アリサは眠っていた。
周りには人がいない。多分、任務にでも行ったんだろうか。
アリサの寝顔を拝見させてもらうと…、すごく綺麗だ。黙っていれば、可愛いのに。
ロイは、取りあえず椅子に座る。
寝息をたてるアリサをみて、ロイは安心した。

「もうしばらくは、起きないと思うぞ。いい麻酔薬が手に入ったからな」

大車が言う。　何時の間に入ったんだろうかねえ？

「それでも、俺はここに居ます。アリサが、起きるまで」

「そうか、分かった」

大車は、そこらにあった椅子に座ると、コーヒーを飲み始めた。ロイも、飲み始める。
コーヒーは、いつもどうりに苦かった。

ふと、アリサの手に目がいく。繊細な、美術品の様なその白い無機質っぽさを感じさせる右手は、周りの白一色に包まれている空間に

溶け込むよう、存在していた。

気がつくと、手を伸ばしていた。何故なら、手の届くところに美しいものがあった。ただ、それだけ。

触れた瞬間、アリサの柔らかな手の感触が、ロイの手に伝わると同時に、

ロイの頭の中に、自分の記憶に無い映像が流れ込んできた。

パパ、ママ、止めて、食べないで！

アリサと思われる人物は、今、目の前で黒いヴァジュラから捕喰されている両親を、ただ、見ていることしか出来なかった。　そして、黒いヴァジュラはアリサに気がついて、迫ってきたところで、暗転。

病室にいた。大車と思われる人物は、アリサにアラガミのことを教えているらしい。

こいつらが、わたしたちの敵、アラガミだ！

モニターには、白いヴァジュラや黒いヴァジュラも映っていたが、何故だろうか…

リンドウが映っていた。

「これは…」

ここは病室だ。仮想空間から、一気に現実に引き戻されたかのような感覚が、ロイの身体を駆け巡る。

そして、驚くことになった。

「ん…、ここは…」

アリサが、目を覚ましたのだ。

大車は、信じられないといったような顔になっている。そりゃ、そ

うだな。ロイは、一人で納得した。あいつ、いい麻酔薬が入ってきていた。とか言ってたからな、ビックリして当然だね。

「失礼するっ！」

大車、退場。

「手、握っていてくれていたのは、貴方だったんですね」

アリサは、逆にロイの手を握っていた。

「すごく温かい気持ちが、自分の中に流れてきて…、あ、でも、最後に突然真っ黒になって…、えっと…とても冷たくて、それで起きました！」

納得をしたかのように、笑顔で言うアリサ。　大丈夫、お前はまだ、何も分かっていない。

「でも、今までこういうことって無かったのに…。なんでですかね？」

「おそらく、前に博士が言ってた感応現象だろう」

始めて起きた現象に、ビックリしているロイとアリサ。つい、そわそわしてしまう。

「あ、でもさ、何時でも使えるようになったら、便利だと思うぜ。まあ、博士に相談してみよう」

「分かりました。…で、ロイはいつまでここにいるんですか？」

ふと、ロイにたずねるアリサ。

「ん、邪魔だったら今すぐにでも帰るぞ。…そう言えば、ジーナとかカノンに御礼言ってなかったからな。今から行ってみるとするかね」

ジーナとかカノン…、この二つの単語が、アリサの頭をよぎっていった。

「いえ、邪魔じゃありません！　むしろ、永遠にいて欲しいです！　フォーエバーですぅ！」

「おい、なんか変だぜ。アリサ、大丈夫？」

若干ひきぎみのロイに、そんなの気にしないと言わんばかりのアリサ。その騒ぎっぷりは、

「君たち、病室だぞここは！　静かにしなさい！」

携帯を片手に怒鳴り込むオオグルマ。

「うるさいですね、先生！　わたしたちの愛の巣に殴り込んでくるなんて良い度胸ですね！先生だからって関係ありません！　返り討ちにしてくれますぅ！」

「いつから君たちの愛の巣になったんだ、病室は！」

最早、自分が一番うるさいとは知るよしもないオオグルマと、そんなの関係ないと言わんばかり…というか言っているアリサ。

そして、

「とにかく、俺を含めないで欲しいね…」

愚痴るロイ。

「…ったく、良く聞き取れなかったじゃねえか。もういい、だから人様に迷惑かけんなよ」

「日本語が成り立っていない、何を引き換えに『だから』とか言ってるの？」

激しく責めるロイ。だってしょうがないじゃん、気になるんだからさ。

「とにかく、病室で騒ぐんじゃねえぞ」

そそくさと立ち退くオオグルマ。　ざまあねえな。

「じゃ、俺も帰るとしますかね」

そう言うと、ロイは立ち上がった。

「ああっ、ちょっとまっｔ」

ガシャン、と音をたてて扉は閉じられた。

ロイは、廊下を見渡す。だれもいない。オオグルマは、どこかへと行ってしまったようだ。

さっきの感応現象といい、

「誰と、話してたのかな？」

ロイは、気になることでいっぱいだった。

ｖｏｌ．１８（後書き）

はい、すいません。
用事があり、中々更新出来ませんでした。
年明けになってしまいましたが、これからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9170x/

神機使い達の戦い

2012年1月4日23時52分発行